

C分科会（概要）

<p>（分科会名） 幼稚園生活が幼児にとって安全なものとなるような環境の配慮や指導の工夫について</p>	<p>（協議の柱） 幼児が遊びや生活の中で安全に関する構えを身に付けるためには、どのような環境の構成や教師の関わりが必要か</p>
--	---

1 三原市立本郷幼稚園の提案の概要

幼稚園教育要領の領域「健康」では、ねらいの一つとして「健康、安全な生活に必要な習慣や態度を身に付け、見通しをもって行動する。」ことが示されている。また、学校安全資料「生きる力をはぐくむ学校での安全教育」（文部科学省）には、安全管理と安全教育が一体となり取組を進めていく必要があると述べられている。

幼児は、身近な大人の援助のもとで、様々な危険に対し、自ら体験し、何が危険であるかを理解して、安全な行動を身に付けていくことが大切であるとする。

そこで、安全に必要な習慣や態度を身に付け、安全に行動しようとする子供を育成するためには、どのような環境への配慮や教師の援助が必要なのかについて、（1）多様な体験活動（遊び・生活）の充実を図る、（2）安全な生活に向けた適切な環境や援助の工夫をする、（3）教師間で共通理解を図る、の3点に焦点を当て取り組んだ実践である。

2 協議内容

（1）協議の視点

幼児が遊びや生活の中で安全に関する構えを身に付けるためには、どのような環境の構成や教師の関わりが必要か。

（2）質疑応答

- 実践事例3について、「5歳児から3歳児を見て」の視点での「安全」について捉えていると考えるが、3歳児の視点からの「安全」についてはどのように考えているか。5歳児は、これまでの経験から支えていくことができたと思うが、5月連休明けの3歳児は、不安定な時期であると思う。その年によって日程を考えたり工夫したりしていることがあるか。
 - ・ 3歳児は、入園して一カ月、集団にも慣れていない中で、日常の関わり、意図的な関わりを重ねてきている。子供の実態に合わせて「ペア」を作り、集会やふれあいをする中で、安心感を積み重ねている。5歳児に教えてもらうことに素直に耳を傾けながら、3歳児の生活の中にも「安全」ということに気持ちが向けられるようになっていく。5歳児はこれまでの体験の積み重ねが大きいので、3歳児は、5歳児の主体的な関わりに支えられていたと思う。
- 「子供たちが主体となり学ぶ安全教育」「教師が主体となり行う安全管理」にはどのようなものがあるか。
 - ・ 「子供たちが主体となり学ぶ安全教育」は、子供たちが気付いて、自分たちで考えること、「教えられる」のではなく「気付く」ことであり、「教師が主体となり行う安全管理」は、未然に危険を防ぐための環境構成である。実践事例2のこのいのぼりづくりのように、解放感を味わいながら、友達と一緒に遊ぶことを楽しむための教師集団の配慮や連携の二つの視点が相互に組み合わせられていくことが大切だと考える。
- 多発する園外保育での事故を受けて、園外保育で通行するルートなどについてより丁寧な配慮が必要であるとする。示してある写真や地図を見る限り、深い用水路があり道幅の狭い道路や

交通量の多い道路を通行している。道を変更するなどの選択肢はなかったか。

- ・ 目的地は子供たちにとって一番安全である場所として選んでいる。ルートについては職員間で「職員の立ち位置」「横断歩道で止まって待つ位置」について重点的に配慮することにした。用水路の安全についても協議したが、それ以上に横断歩道での安全に留意し、人員を配置した。

(3) 協議

- カンファレンスを通して、いろいろな目線で安全について見ていけるよう、職員で共通理解を図り継続的に取り組んでいく必要がある。
- 併せて保護者への啓発も必要である。教育的意図からの遊びと保護者の認識が違うことがあるため、保護者へ教育内容を伝えていくことも大切だ。緊急時の引き渡し訓練もどうやったら安全を図れるか、連絡網を使い緊迫感をもって行うようにしたい。
- 避難訓練では、実際に職員が避難場所へ行って問題点を見つけ、持ち物等を確認することも必要だ。
- 自然とのかかわりでは、安全に対する想定を細かく職員で共有することが大切である。事前下見などで危険を把握し共通理解するとともに、毛虫などを見つけたら子供たちが危険かどうか調べられるようにすることも必要だろう。
- 子供たちに経験させたいこと、挑戦させたいことの見極めが難しい。すべてを禁止・指示だと付けていきたい力が十分に付けられない。かかわり方を考えたり、環境を整えたりすることが必要である。また、子供たちの経験から、子供たちに考えさせていくことも必要だ。

3 結論

- (1) 安全管理の徹底を行う。
 - ・ 子供を取り巻く環境について、全職員が日々意識し、共通認識していく。
 - ・ 行事前後の提案、協議、反省を全職員で行い、環境構成や配慮について共有する。
- (2) 子供自身の主体性を育てる。
 - ・ 子供と教師の信頼関係を基に主体性を育む。
 - ・ 日常生活の中で、危険に直面した時、安全な遊び方を考えあう場を設け、自ら安全に過ごそうとする気持ちを積み重ねていく。
 - ・ 教師は安全に遊ぶことができる環境を工夫し、子供が遊びを充実させていけるようにする。
- (3) 自然への関わりに対する安全教育を行う。
 - ・ 自然との関わりについて、教えるべきことは、年間指導計画に明記して行う。
- (4) 地域、警察署との関わりを持つ。
 - ・ 警察署と連携をすることで子どもたちは「守ってもらっている」体験をすることができる。
 - ・ 様々な目線から安全について地域と連携をする。
- (5) 保護者啓発を行う。
 - ・ 様々なことを想定し、保護者、園とで共有していく。(引き渡し訓練など)
 - ・ 行事など「なぜ行うか」「いつ行うか」「どのように行うか」の説明をして理解を得る。
 - ・ 教育的意図からの遊びと保護者の認識が違うことがある。日々、保護者へ教育内容を伝えていくことが大切である。